

韋応物「冰賦」の諷諭性について

山田 和大

はじめに

韋応物詩は五百七十首が現存しており、韋詩を読む機会には比較的多く得られる。一方、韋応物の散文作品は非常に少なく、妻元蘋墓誌、「大唐故東平郡鉅野縣令頓丘李府君墓誌銘并序」、そして、『韋蘇州集』系統の版本のはじめを飾る「冰賦」^{〔一〕}（巻一）の三つしか見られない。本稿では、「冰賦」を採りあげる。「冰」は韋応物詩に二十例見られ、人の心の清らかな性質を表したり、「雪」とともに冬の厳しい寒さの象徴として詠われたりする。これらのイメージを持つ氷を詠う一方で、「冰賦」では「夏冰」を題材としている。この点について、韋応物には「夏冰歌」（巻十）という、内容・表現ともに「冰賦」とリンクするかのよう^{〔二〕}に作られている歌行がある。「夏冰」を主題として詠む作品は少なくとも『文選』、韋応物以前の唐詩には見られず、モチーフの選定という点で興味深い。また、いずれもその「夏冰」を用いつつ諷諭性を持っている点でも共通する。

そこで、本稿では「冰賦」を検討するための比較対象

として「夏冰歌」の内容をまず確認した上で、「冰賦」の内容を、「夏冰歌」との相違点を含めて詳しく見ていく。最後に「冰賦」の諷諭性の背景について考察してみたい。なお、韋作品は、『四部叢刊』本『韋江州集』によった。

一 「夏冰歌」の内容

まず、「冰賦」と全く同じモチーフを使う「夏冰歌」を換韻箇所に基づき四段に分け、内容を確認する。

- 1 出自玄泉杳杳之深井 出づるに玄泉の杳杳たるの深井よりし
- 2 汲在朱明赫赫之炎辰 汲まるるに朱明の赫赫たるの炎辰に在り
- 3 九天含露未銷鑠 九天露を含みて未だ銷鑠せず
- 4 閭闔初開賜貴人 閭闔初めて開き貴人に賜ふ

氷は暗くて色の濃い泉のわき出る深い井戸に生じ、暑い夏の盛りに汲み出される。宮殿は露をたたえるほどに暖かいのに氷はまだ溶けておらず、宮殿の門が開

かれたかと思うと氷が身分の高い人々に下賜された。

作中舞台の設定をする。深い井戸から汲み出された氷が夏のさなかでも溶けることなく、宮殿に集まる人々に振る舞われたことを述べている。

- 5 碎如墜瓊方截璐 碎かるること瓊を墜とすがごとく方なること璐を截るがごとし
- 6 粉壁生寒象筵布 粉壁 寒を生じ象筵布かる
- 7 玉壺紈扇亦玲瓏 玉壺紈扇も亦た玲瓏たり
- 8 座有麗人色俱素 座に麗人有りて色は俱に素たり

氷が砕かれた様子は美玉を落としたかのように細かくさらさらしており、四角くされた様子は美玉を切りそろえたかのよう。真っ白な壁には寒気を生じ、象牙製の冷たい座席が敷かれたかのように涼しくなった。玉製の壺も絹で作った扇も氷と同じく明るく透き通って美しく、同席の美人の色は氷と同じくみな白い。

宮殿内の様子を詠む。氷の美しさと涼しさに触れ、また同じ場にある器物や美人の、透き通っていたり、白かったりする美しさを描写する。氷によって作られた涼しい場の中で見られる「玉壺」「紈扇」「麗人」の様子も明

るく涼しげで、その場をより涼しく感じさせるような器物や人の配置がされている。

- 9 咫尺炎涼變四時 咫尺の炎涼 四時を變ずるがごとし
- 10 出門焦灼君詎知 門を出づるの焦灼 君詎ぞ知らんや
- 11 肥羊甘體心悶悶 肥羊甘體あるも心は悶悶たり
- 12 飲此瑩然何所思 此を飲めば瑩然として何の思ふ所ぞ

氷のおかげで宮殿というわずかな範囲に限り、暑さ寒さは四季が変わったかのように涼しくなっている。一方、戸外の酷熱については、聴衆のみなさんはご存じのはず。この暑い時期、うまい羊やおいしい酒があっても心が晴れることはないが、この氷を飲めば気持ちがつつきりとして思い悩むことはなくなるのだ。

宮中と外部の温度差を述べ、氷によってもたらされる室内の快適さや、氷を飲むことによつて得られるすつきりした気分を「貴人」たちが享受していることを詠む。

- 13 當念闌干鑿者苦 当に念ふべし 闌干として鑿つ者の苦を
- 14 臘月深井汗如雨 臘月の深井に汗雨のごとくな

涙を流して氷を掘り出しているものたちの苦勞を思うべきである。彼らは冬十二月の寒く深い井戸の中で汗を雨のように流していることだろうか。

前段までの氷の恩恵を届けてくれる作業者に思いを致す必要があると述べる。身分の高いものが暑い夏を快適に涼しく過ごすために、冬の寒い中、汗を流すほどに熱を発しながら重労働である氷の掘削をするものがあるという、風刺の心が込められている部分である^[2]。

以上のように、韋応物「夏冰歌」は氷を使っている夏の宮中の涼しさ、あるいは氷そのものや、宮中の美しさを詠い、最後に冬に氷を取るために働く人たちに思いを致すべきだと詠んで締めくくられる。

では、「冰賦」の内容はこれと比較してどのようなものなのだろうか。

二 「冰賦」の内容

まず、「冰賦」の構成を示すと、以下のようである。

〔第一段落〕 舞台設定（序）

〔第二段落〕 賓客の答え①氷の短所の概説

〔第三段落〕 賓客の答え②氷の客観的な特徴

〔第四段落〕 賓客の答え③氷の短所の詳説と

なるは則ち美なり。而るに大王 其の短を識らず。）と、曹植が氷の短所を知らないことを責める。具体的には、

夫謂之瓊玉、竊名器也。氣奪天時、干陰陽也。内熱飲之、媒其疾也。寵一物而三失德。（夫れ之を瓊玉と謂ふは、名器を窃するなり。氣 天の時を奪ふは、陰陽を干すなり。内熱ありて之を飲まば、其の疾を媒するなり。一物を寵して三たび徳を失す。）

と、①氷を宝石にたとえることが名器の名を冒すことになること、②夏の特徴である暑さを奪うことが寒暑の調子を狂わせることになること、③体内に熱を持っている状態で氷を飲むと病になること、の三点の短所を挙げる。その上で、次のように言う。

且出寒暑而至下、薦宗廟而至高。僕竊感之而歎歎。安得不爲之而抽毫。（且つ寒暑を出だすは至下にして、宗廟に薦むるは至高なり。僕窃かに之に感じて歎歎す。安くんぞ之が爲にして毫を抽かざるを得んや。）

氷を使い、人工的に暑さ寒さを制御することは最低で、氷を宗廟に備えることが最高である。王が宗廟に氷を備えることなく、人工的に暑さを抑えるために氷を使うことが残念で、賦を作つて言上せずにはいられないと言う。第三段落では、氷の特徴と、氷ができる過程を述べる。

〔第五段落〕 陳王の反省（結）

第一段落は、賦の舞台設定をする部分である。大屋根の下、日光の差さないところにいて、竹のむしろや扇を用意していてもやりすぎせない暑さの中、陳王曹植が鬱屈した気持ちを発散するために王祭を上客として宴席を設ける。そのときに、賓客たちに氷を配布して暑さが少しの間でも和らぐことを喜ぶ。そこで陳王は、

含皎皎兮瓊玉姿、氣淒淒兮奪天時。飲之瑩骨兮何所思。可進於賓。請客卿爲寡人美而賦之。（皎皎たる瓊玉の姿を含み、氣は淒淒として天の時を奪ふ。之を飲めば骨を瑩き何の思ふ所ぞ。賓に進むべし。請ふ 客卿 寡人の為に美として之を賦せんことを。）

氷は真つ白な瓊玉のような姿で、発する氣は冷たく、今、天が定めている夏の暑氣を奪い取る。この氷を飲めば骨まですつきりと磨かれるよう何を思い悩むことがあるうか。お客方に氷を進呈しよう。どうか私のために、氷を褒め称えて賦を作つてくれないだろうか。

と歌い、賦の製作を客である王祭に依頼する^[3]。

第二段落では、曹植の依頼を受け、王祭が賦を詠みはじめる。その初めに、「美則美矣。而大王不識其短。」（美

夏の暑さの中でも冬の寒さを保ち続けていること（「居炎天之赫赫兮、獨嚴厲乎稜稜」——炎天の赫赫たるに居りて、独り嚴厲乎として稜稜たり）を述べたのち、そうした特徴を持つ氷のできる過程を次のように詠む。

其始也、月玄冥、日北陸、天地閉、水泉縮。動靜一變、剛柔反覆。壯以烈風、積如羣玉。由是、依廣潭漫、憑高崢嶸。大寒御節、萬物潛形。（其の始まるや、月は玄冥、日は北陸、天地閉ぢ、水泉縮む。動靜一変し、剛柔反覆す。壮なるは烈風を以てし、積まるること羣玉のごとし。是に由りて、広きに依りて潭漫たり、高きに憑きて崢嶸たり。大寒の節を御するや、万物 形を潜む。）

その始まりは、月は冬の神玄冥がつかさどる孟冬十月、太陽は北の天道を通り、天地が閉じ、泉が縮こまるような季節です。動いていた液体（水）の状態から静かに動かない固体（氷）の状態に一度に変化し、柔らかかった水の状態から堅い氷の状態になります。氷の堅さはげしい風の冷たさによって作られ、積み上がることに言ったら多くの宝玉が重なっている様子にも見えます。こういうわけで、広い場所では氷が平面的に広がり、高いところにおいては険しく高い様相を呈します。大寒の時期になると、万物はその姿を隠します。

ここでは、氷について褒めたり批判したりすることなく、客観的な描写がされている。これに続いて、

浮彩浩浩、仰吞素靈、羣山早曙、陰壑夜明。（浮彩浩浩として、仰ぎて素靈を呑み、羣山早に曙け、陰壑夜に明るし。）

氷の色は彩りがあって白く、空を仰いで白い精靈を飲み込んでいるかのような色で、氷のきらめきは山々が早くに夜明けを迎えたか、あるいは暗い谷が夜に明るさを保っているかのように明るく輝いています。

とあるのは、氷が冬の清冽な空気の中にきらきらと輝く様子や、その明るさを詠み、氷の美しい側面に着目する。第四段落では、第二段落で触れられている短所をさらに詳説して、氷の害悪を批判的に述べる。この段落の内容からは諷諭の精神を読み取ることができる。まず①氷を寶石にたとえることに関連して、次のように言う。

若尊卑異等^①、頒命有度、碎似墜瓊、方如截璐。況粉壁雲矗、象筵霜布、座有麗人、皎然俱素。雖衆賔之同輝、諒爲物之難固。其竊名假質、以謬一時之賞也如此。（尊卑等を異にし、頒命に度有るがごときは、碎かること瓊を墜とすに似て、方なること璐を截るがごとし。況んや粉壁雲のごとく矗として、象筵霜のご

に関わることを批判している部分だと考えられる。これに続く氷の美しさや部屋の白さは、身分の高いものの得る誉れ、あるいは身分の高いものの属する場Ⅱ官僚世界を象徴しているものであろう。この中で、見た目は同じく立派だが、その内実は氷が溶けるように、誉れを受けつづけるに十分な性質を保ち続けることができないものがあると言うのだらう。つまり、高官の内実と、外面として表れる身分との釣り合いがとれていないことに對し、夏の氷の性質を借りて風刺している部分だと考えられる。②寒暑の調子を狂わせることについては、次のように言う。

若乃對修竹、臨方塘、俾炎作寒兮反我天常、嗟絺綌之失御於三伏兮、亦紈扇委篋而内傷。其嚴沍之威、以干陰陽之候也如此。（乃ち修竹に對し、方塘に臨み、炎をして寒を作し我が天の常に反せしむるがごときは、絺綌の御を三伏に失ひ、亦紈扇は篋に委ねられて内傷するを嗟く。其の嚴沍の威の、以て陰陽の候を干すや此のごとし。）

職務を離れ、長い竹に對面したり、四角い池のそばに行ったりして宴をし、炎天を寒くさせ、われわれの天の道理に反するようなことをさせることで、葛で作った夏服がその能力を三伏という暑い時期に失うことになり、また絹で作った扇が箱に入れられて心を傷つ

とく布かれ、座に麗人有りて、皎然として俱に素たるをや。衆賔の輝きを同じくすと雖も、諒に物たるの固たること難し。其の名を窃み質を仮り、以て一時の賞を謬つや此のごとし。）

身分の高い者と低い者がその等級を異にし、氷をくばる命令に区別があるようなことについては、次のように言えます。氷を砕く様子は美玉を落としたのに似て、氷が四角くされている様子は美玉を切りそろえることにたとえられるように美しいものです。ましてや白い壁がわき上がる雲のようにそびえ立っており、象牙で作った白く豪華な座席が霜が降りたかのように敷き詰められ、宴席に美人をはべらせ、部屋中が真っ白になっっている状況の中ではなおさら美しく見えます。多くの賓客の氷は輝きを同じくしていますが、本当のところは玉のように形を保って固体であり続けることはできないのです。その名を盗み、玉の「美」という性質をかりることで一時のほまれをあやまつて得てしまうのはこのようであります。

玉のように美しさを保ち続けることができないにも関わらず、玉と同等の評価を受けられると錯覚させてしまうのがよくないと述べる。

この部分は、はじめに身分の差があることで、命令に差が出てくることを言うから、「氷」を通して身分の差異

けられるのを我々は嘆くことになるでしょう。その厳しい寒さの力が陰陽の時節を侵害することといったら、このようなものであります。

葛で作った夏服や絹で作った扇は、夏の暑いさなか、涼しさをもたらす。ここは、氷を使って天の道理に反して部屋を涼しくすることで、これらの器物が用をなすことができなくなるということと述べる。この部分は、自分たちが楽しんだり、気分がよくなるようにしたりするために、他者を傷つけたり、苦しめたりする人物がいることの害悪を風刺していると見ることができると言える。

③病気になることについては、次のように詳説する。

若皎潔的礫、與時消釋、或沉珠於杯、或化璞於液、王將甘飲、聊以自適。豈知乎、一寒一溫、日夜相激、久之以生疾兮、内外不和而怵惕。其翫意而媒疾也如此。（皎潔的礫として、時と与に消釈するがごときは、或いは珠を杯に沈め、或いは璞を液に化するがごとき、王將て甘飲し、聊か以て自適す。豈に知らんや、一寒一溫、日夜相激しく、之を久しくして以て疾を生じ、内外不和にして怵惕あらんことを。其の意を翫びて疾を媒するや此のごとし。）

白く清らかな氷が、時の移り変わりによって融けていくことについては、あるいは宝玉を杯に沈め、ある

いは宝玉が液体となるかのように思え、陳王様はそれを飲むことで、しばらくよい気分になることができるでしょう。ただ、王はご存じないのでしよう、寒さや温かさが日夜にせめぎあうことが、長い間続いていると病を生じ、体内外の調和が崩れ、おどろきおそれることになってしまうことを。情趣を追求して病をまねくのは、このようであります。

美しい氷を杯に入れたり、氷を溶かしたものを飲んだりすると、その場での気分はよくなるが、長い目で見ると寒さ暑さを繰り返すことで体を病にかかりやすい状態にしてしまうという。これも①の続きとして、一見良さそうなものを取り入れた結果、国全体に深刻な悪影響を及ぼしてしまうことを風刺しているのだと考えられる。ここまですべて承けて、最後に王粲は陳王に忠言を述べる。

觀其力足以淒一室、利庖厨、俾甘肥晚敗、醇釀不渝。非可調湊理、安營魄。奈何以誇客。(其の力の以て一室を淒とし、庖厨に利ありて、甘肥をして晩く敗せしめ、醇釀をして渝はらざらしむるを觀よ。湊理を調し、營魄を安んぜしむるべきに非ず。奈何ぞ以て客に誇らん。)

氷の力が一室を涼しくし、厨房にとってよい効果があり、うまい食べ物を腐りにくくし、うまい酒の味を変わりにくくさせるのに十分であることをご覧にな

戒めるきまりを記しておくことにいたします。

自らの見識の狭さを反省し、王粲の意見を尊重して文言を盆に刻み、自戒のためのものとするという。

「夏冰歌」との共通点として、「冰賦」の語彙、あるいは表現が「夏冰歌」の語彙・表現と重複することが挙げられる。「夏冰歌」の第1句の「玄泉」、第5・6句「碎如墜瓊方截璐、粉壁生寒象筵布」、第7句「紈扇」、第8句「座有麗人色俱素」、第12句「飲此瑩然何所思」がそれである。同じモチーフを、似た表現を使って表現するあたりには、韋応物のこだわりが見える。また、「夏冰」を通して諷諭性を持たせるという点も共通する。

こうした諷諭という主題を共通に持ち、同一のモチーフを用いて、同じようなことばを使っているが、氷そのものの描写について言えば、「夏冰歌」では純粹に氷の美しさや、氷のある場がきらびやかであることを詠う一方、「冰賦」では氷のマイナス面にも言及する点に違いがある。この氷のマイナス面に着目し、諷諭性を込めるところに韋応物「冰賦」の特徴があると考えられる⁵⁾。では、そうした詠み方をする背景としては、どのようなものが考えられるのであろうか。

三 「冰賦」の諷諭性の背景

韋応物の人生は玄宗の側近でなくなったことに起因する挫折感に大きく支配されていた。彼はそうした挫折感

つてください。氷の力はヒトの身体をととのえたり、ヒトの魂を安定させたりするためのものではありません。どうして客にほこらしげに自慢する必要があるのでしょうか。

厨房での使用にこそ、夏の氷のメリットが存在し、暑気払いのために使ってはならないというのは、使いどころを過ってはならないことである。「適材適所」を守り、国を治めるべきだとも述べているのであろう。第五段落では、ここまでの王粲の賦を承け、陳王曹植が最後に次のように述べて作品が終わる。

寡人生於深宮、懽於服食。左右唯燕姬趙女、侈服美色。微客卿之言、則何以雪余惑。方當命有司而撤冰、書盤孟以自式。(寡人深宮に生まれ、服食に懽し。左右唯だ燕姬趙女ありて、侈服美色あり。客卿の言微かりせば、則ち何を以てか余が惑ひを雪がん。方に当に有司に命じて氷を撤き、盤孟に書して以て自ら式とすべし。)

わたくしは宮殿の奥で生まれ、服飾や食事のことには理解がありません。身の近くには燕の姫や趙の美女がおり、豪華な服と美しい女性に囲まれています。上客王仲宣どのの意見がなかったならば、どのようにしてわたくしの惑った心をすすぐことができましょうか。今より役人に命じて氷をまかせ、円盤と方孟に自らを

を抱き続けてきた中で、諷諭詩を多く作っている。「冰賦」の為政者批判もそれと同じ軸で考えていくことができる。

韋応物詩には、しばしば官吏としてのあるべき姿を詠んだものが見受けられる。たとえば、洛陽丞期の作である49「示従子河南尉班」(巻二)の序には、「永泰中、余任洛陽丞、以撲扶軍騎。時従子河南尉班、亦以剛直爲政。俱見訟於居守。因詩示意。府縣好我者、豈曠斯文。」(永泰中、余洛陽丞に任ぜられ、以て軍騎を撲扶す。時に従子河南尉班も、亦た剛直を以て政を爲す。俱に居守に訟せらる。詩に因りて意を示す。府県の我を好む者、豈に斯の文を曠しくせんや。)とあり、官吏として剛直であることがよいという意識が窺える。このように、気骨があり、正直であることによって訴えられることとなり、自分たちの政治の仕方了他者に理解してほしいという言い方をしていることは重要である。

この発言から、韋応物がよい政治をしようとしていたことを妬んだり、あるいは彼を邪魔だと思った人物がいたりしたのだと考えられるが、訴えられるに至るまでの具体的な経緯について、沈作喆「補韋刺史伝」は「永泰中、遷洛陽丞。兩軍騎士、倚中貴人勢、驕橫爲民害。應物疾之、痛繩以法。被訟弗爲屈。」(永泰中、洛陽丞に遷せらる。兩軍の騎士、中貴人の勢に倚りて、驕横して民害を爲す。応物之を疾み、痛繩するに法を以てす。訟せらるるも爲に屈せず。)とまとめている。ここに見える「兩軍の騎士」は、回紇軍と神策軍を指す。安史の乱を平定

するために、回紇軍や地方軍であった神策軍の力を借りたが、そのうち、神策軍が天子の禁軍となり、宦官によってコントロールされるようになった結果、宦官の兵権掌握が進んでいった。こうした中、神策軍は略奪を繰り返すなど、横暴な振る舞いをするようになる。このことを韋応物は同じく洛陽丞期の作³⁵⁹「広徳中洛陽作」（巻六）で「飲藥本攻病、毒腸翻自殘。」（薬を飲みて本より病を攻めんとするも、腸を毒して翻つて自ら残ふ。）と表現している³⁶⁰。

韋応物が挫折後初めて官吏、すなわち洛陽丞に就任した広徳年間の状況はこのようであった。当時、韋応物の考えるよい政治に向かっていかなない人物として宦官があり、その影響下にあったものたちもいたことだろう。「冰賦」作成時には、こうした人物たちの存在が念頭にあったと思われる。このままでは「良吏」が不利益を被り、奸臣がはびこるようになってしまおうという危機感が、「冰賦」の表現になって表れたのだと考えられる。

改めて「冰賦」の表現と関連させて考えてみる。

①内面と外面上の身分の齟齬という点について、韋応物は政治をする上で剛直であり、正義を貫くような態度を重視していた。こうした性質を持っている人物こそが高位にいるべきだと考えていたと思われる。外面上美しく、内面にも永遠性を持ち続ける美玉は、そうした理想的な人物のたとえだと考えてよい。一方の水は、玉の内面の性質である永続性を欠いている。これは、外面上は

高位にあるが、実際には国の安定のための善政を目指していなかった宦官の様子とぴったり合う。

②自己の快楽のために他者を傷つけ、苦しめるものの批判について、宦官が天子の禁軍となった神策軍を動かしていたことが念頭にあっただろう。「冰賦」に見える、「氷があることで本来夏に働くべきであった器物が働けず、天の時期を奪ってしまう」という表現は、宦官の行為によって、本来よく動けたはずの善良な官吏がまともに働けなくなり、天子の統治している政治機構そのものが十分な機能を果たせなくなった状況と重なる。

③一見良さそうなものを取り入れた結果、国に悪影響を及ぼすことについて、「冰賦」の「氷を飲むと気持ちがいよいよ、病の仲立ちとなってしまう」という表現は、先に挙げた「広徳中洛陽作」の「飲藥本攻病、毒腸翻自殘。」と同じこと、つまり回紇軍と神策軍の利用の弊害を表していると考えられる。

このように見てみると、「冰賦」は玄宗亡き後の宦官の専横を批判しているものだと考えることができる。韋応物の「良吏としての自覚」³⁶¹が、「夏冰」のモチーフに目をつけさせ、従来、見られなかった「夏冰」の短所を詠み、諷諭性を付与する表現の創出につながったのだらう。

おわりに

本稿では、韋応物「冰賦」について、彼が同じく「夏

冰」をモチーフにして作った「夏冰歌」との違いを考えながら、その諷諭性とその背景について論じてきた。

韋応物はなぜ「夏冰歌」ではなく、「冰賦」で「夏冰」のマイナス面に着目し、それを通して諷諭性を表現できたのか。臆測に過ぎないが、一つには、「賦」というジャンルが持つ、対象物のあらゆる性質を列挙するという特性に着目したのではないかと考えられる。つまり、「夏冰歌」は「歌」であるから、自ずから使える字数の制限があっただろうし、ある程度の内容の方向性も決まってしまう、「冰賦」に見られたような、氷の様々な面を叙述するのにはあまり向かないと考えていたのではないだろう。賦であれば、その性質上、多面的な見方が許容・促進され、従来あまり見られなかった「夏冰」の短所を意識しやすくなる。「夏冰」の短所を賦の方に入れて詠んだのは、このあたりに理由があるのかもしれない。

現存の韋応物の賦が「冰賦」のみであることから推し量るに、韋応物は賦や散文を多くは作っていなかっただろう。韋応物詩には、諷諭性の高い「歌行」が幾つか見られる。韋応物はなぜ「賦」などの散文を多作する方法を採らず、「歌行」で諷諭性を表現するようになったのか。これと関連して、「冰賦」と『文選』所収の賦との関係についても考えたい。表現や構成の面で、「冰賦」は『文選』所収の賦と重なる部分がある。これを詳細に検討し、併せて韋応物詩と『文選』所収の作品との関係を考察すれば、韋応物が賦をあまり作らなかった理由の解明、ひい

ては、韋応物の文学観の理解にもつながると思われる。

また、「賦」の歴史の中で、韋応物「冰賦」がどのような位置づけにあるのかも考察していく必要があるう。

これらの点については、稿を改めて論じてみたい。

注

〔1〕前野直彬『中国文学序説』（東京大学出版社、一九八二年）九八頁は、賦を韻文のジャンルに入れて解説されているが、ここでは伝統的な分類に従っておく。

〔2〕赤井益久氏は、「夏冰歌」を「政治の腐敗を指摘し、民衆の窮状を描写する作」と分類されている。「韋応物と白居易」（『中唐詩壇の研究』第Ⅱ部第一章、創文社、二〇〇四年）一一三頁。

〔3〕この曹植が賦の製作を依頼し、王粲が返答として賦を作るという設定は、謝莊「月賦」（『文選』巻十三）に先例があり、これを意識していると思われる。

〔4〕この表現と似たものに、「幽居」（巻八）に「貴賤雖異等、出門皆有營。」（貴賤等を異にすとも、門を出れば皆営み有り。）とある。

〔5〕年代的に韋応物が見得たであろう類書『芸文類聚』には、少なくとも「夏冰」の短所に関する記事は見られない。

〔6〕宦官の専横に至るまでの経緯は、赤井益久「韋応物詩論——屏居の位相を中心に——」（『中唐詩壇の研究』第Ⅰ部第三章 五九頁～六一頁）を参考にまとめた。

〔7〕これについては、前掲注〔2〕赤井著書「第六節 良吏

としての自覚」一一五頁～一一九頁参照。

※編集委員からのお詫び

山田和大氏「韋応物『冰賦』の諷諭性について」は、編集作業の段階でファイルを取り換え、「中国中世文学研究」第63・64合併号には査読委員の意見による修正を加える前の原稿を掲載してしまいました。関係諸氏にはお詫びを申し上げますとともに、本号に改めて修正稿を掲載させていただきます。

歌詞としての「長恨歌」

―白居易歌詩の押韻について―

陳 翀

一

拙稿「中唐における白居易『琵琶引』享受の原風景―その原本形態及び歌唱形式について―」は、白居易の名作である「琵琶引」を取り上げ、「琵琶引」が当初は歌われる歌詞として作られた作品であることを明らかにし、さらに、その押韻の仕組みが一般の七言排律詩の偶数句押韻とは異なっており、上下句押韻という独立したパートが存在していることを指摘した^[1]。引き続き、本稿では同じく『白氏文集』巻十二に収録されている「長恨歌」に焦点を当て、その押韻の仕組みについて考察を加える。これによって、「琵琶引」と同様に、「長恨歌」も一定の曲調に従って創作された歌詩であり、当初は歌われる歌詞として作られたものであることを明らかにする。

二

「長恨歌」研究史を振り返ってみるとき、恐らく殆どの研究者が、「長恨歌」を主に李楊故事を詠ずる七言排律

詩、つまり長篇の叙事詩として認識してきたことが看取できる。このような視点は、近年公開された「長恨歌」関連の専著及び訳注書にも踏襲されている。例えば、下定雅弘氏は、『長恨歌 楊貴妃の魅力と魔力』において、「長恨歌」の構造について、次のように分析している^[2]。

「長恨歌」は大きくは二段に分けることができる。前段は「漢皇色を重んじて傾国を思う、御寓多年求むれども得ず」から、七三・七四句「悠悠たる生死別れて年を経たり、魂魄曾て来たりて夢にだに入らず」までで、人間世界における玄宗と楊貴妃との愛の物語である。玄宗が絶世の美女楊貴妃をみつけ、貴妃への愛の虜となつて過ぐす日々と、貴妃が馬嵬で亡くなって、玄宗が悲嘆にくれるさまを歌っている。

後段は、七五・七六句「臨邛の方士鴻都の客、能く精誠を以つて魂魄を致す」から、最後の「天長く地久しきも時有りて尽く、此の恨み綿綿として絶ゆ